２０２３年度

事　業　報　告　書

Meitoku
since1925

学校法人千葉明徳学園

目　　次

Ⅰ．法人の概要----------1
１．法人の名称----------1
２．事業所の所在地----------1
３．建学の精神----------1
４．法人の沿革----------1
５．設置する学校----------2
６．附帯事業----------2
７．姉妹法人----------2
８．役員----------2
９．教職員の状況----------3
１０．土地及び建物の状況----------3
１１．学生・生徒・園児の数----------4

Ⅱ．事業の概要----------5
１．学園全体の状況----------5
２．法人事務局----------5
３．千葉明徳短期大学----------6
４．千葉明徳高等学校----------9
５．千葉明徳中学校----------12
６．千葉明徳短期大学附属幼稚園----------14
７．明徳本八幡駅保育園----------17
８．明徳浜野駅保育園----------18
９．明徳やちまたこども園----------20

Ⅲ．財務の状況----------23
１．事業活動収支の推移----------23
２．事業活動収支計算書における財務比率の推移----------24
３．施設・設備への投資額の推移----------25
４．借入金の推移----------25
５．貸借対照表の推移----------26
６．貸借対照表における財務比率の推移----------27

Ⅰ．法人の概要

１．法人の名称

学校法人千葉明徳学園

２．事務所の所在地

千葉県千葉市中央区南生実町１４１２番地
電話番号　：０４３－２６５－１６１１
ＦＡＸ番号：０４３－２６５－１６５１
ＵＲＬ：　https://www.chibameitoku.ac.jp

３．建学の精神

「明明徳於天下者先致其知」

明徳を天下に明らかにせんとする者は、先づその知を致せ。

法人名及び開設する全ての学校、施設名に用いられている「明徳」は、中国の古典「大学」の一部にある「明明徳於天下者先致其知」（明徳を天下に明らかにせんとする者は、先づ其の知を致せ。）を引用したものである。「明徳」の由来は、約２０００年昔の中国の古典「大学」にある。「大学」といっても高校を卒業してから行く大学のことではなく、「小学」に対する「大学」の意味である。「小学」とは「小さな学問」、いわゆる、よみ・かき・そろばんといった個人が生きていくために必要な身の回りの基礎的な学問で、一方、大学は小学よりもっとレベルの高い大きな学問で、自分が生きるためではなく世のため人のためになる学問を意味する。「大学」には、大学を究めるためにはどうしたらよいのかが次のように書かれている。

「大学の道は明徳を明らかにするにあり」

「明徳」とは人が天から得たすぐれた能力、人間として生まれながらに持っている人間性であり、明徳を明らかにする、とはそれを輝かせる、ということであり、それこそが本学園の使命である。

４．法人の沿革

１９２５年　１月　　千葉淑徳高等女学校　設立　創立者 福中儀之助 初代校長に就任（千葉市登戸町３丁目）
　　４月　　開校式　挙行（定員６００名）
１９４３年　７月　　財団法人千葉淑徳高等女学校となる
１９４７年　５月　　学制改革により千葉明徳高等学校・同中学校に改組
１９５１年　１月　　学校法人化し、学校法人千葉明徳学園となる
１９６３年　４月　　高校男子部の新設
１９６４年１０月　　千葉市中央区南生実町へ全校移転

１９６６年　５月　　体育館　竣工
１９６７年　５月　　千葉明徳学園幼稚園　設置認可
１９７０年　１月　　千葉明徳短期大学　設置認可
　　４月　　千葉明徳短期大学　開学
１９７２年　４月　　千葉明徳中学校最終卒業生高校進学　以後休校
　　千葉明徳学園幼稚園から千葉明徳短期大学附属幼稚園に改称
１９７４年　４月　　高校　男女共学となる
１９９２年　７月　　現理事長 福中儀明 理事長就任
２００３年１０月　　明徳本八幡駅保育園　開園
２００６年　４月　　社会福祉法人千葉明徳会　設立　明徳土気保育園　開園
２０１０年　４月　　明徳浜野駅保育園　開園
２０１１年　４月　　千葉明徳中学校　開校
２０１２年　３月　　千葉市と「避難所施設利用に関する協定」締結
２０１３年　４月　　社会福祉法人千葉明徳会　明徳そでにの保育園　開園
２０１５年　３月　　学校法人北総学園と合併
　　４月　　明徳やちまたこども園　開園
２０１８年　４月　　千葉明徳短期大学附属幼稚園 幼稚園型認定こども園に移行
２０２０年　４月　　社会福祉法人千葉明徳会　明徳土気保育園
　　幼保連携型認定こども園　明徳土気こども園に移行

５．設置する学校

（１）千葉明徳短期大学　保育創造学科
（２）千葉明徳高等学校　全日制課程普通科
（３）千葉明徳中学校
（４）認定こども園千葉明徳短期大学附属幼稚園
（５）明徳やちまたこども園

６．附帯事業

（１）明徳本八幡駅保育園（第二種社会福祉事業）
（２）明徳浜野駅保育園（第二種社会福祉事業）

７．姉妹法人

社会福祉法人千葉明徳会（明徳土気こども園・明徳そでにの保育園を運営）

８．役　　員　（２０２４年１月１日現在）

理事長　　福中　儀明
理　事　　由田　新（千葉明徳短期大学学長）
理　事　　宮下　和彦（千葉明徳中学校・高等学校校長）

理　事　　鈴木　總美
理　事　　北村　都美子
理　事　　木原　稔
理　事　　髙浦　芳一（内部監査室長）
監　事　　荒木　由光
監　事　　神子　信行

９．教職員の状況（専任教職員数及び平均年齢）（２０２４年３月３１日現在）

	人員数	平均年齢
短期大学教員	１５	４９．５
高等学校教員	５７	４２．４
中学校教員	１８	３８．１
幼稚園教員	２３	３４．１
本八幡駅保育園	１０	３４．６
浜野駅保育園	９	３９．０
やちまたこども園	１４	３３．１
事務職員	２９	４３．８
合計	１７５	４０．３

（注）役員（理事）は除く

１０．土地及び建物の状況

（１）土地の状況（２０２４年３月３１日現在）　㎡

	法人	千葉明徳短期大学	千葉明徳中学校・高等学校	千葉明徳短期大学附属幼稚園	やちまたこども園	合計
校　　地	０	１３，００５	６８，２７９	４，５５０	２，８７１	８８，７０５
その他の土地	４７２	０	６８，６７７	０	０	６９，１４９
合計	４７２	１３，００５	１３６，９５６	４，５５０	２，８７１	１５７，８５４

（２）建物の状況（２０２４年３月３１日現在）　㎡

	法人	千葉明徳短期大学	千葉明徳中学校・高等学校	千葉明徳短期大学附属幼稚園	やちまたこども園	合計
校舎	０	３，８４４	１２，０１６	１，７１２	７０５	１８，２７７
附属施設	０	０	３，４１９	０	０	３，４１９
その他の建物	０	１０	４８	０	０	５８
合計	０	３，８５４	１５，４８３	１，７１２	７０５	２１，７５４

１１．学生・生徒・園児の数

（２０２３年５月１日現在）

部門	入学定員	収容定員	学生・生徒・園児数		
千葉明徳短期大学	１２０名	２４０名	２１６名	１年	９３名
				２年	１２３名
千葉明徳高等学校	４００名	１，２００名	１，０７６名	１年	３９４名
				２年	３８０名
				３年	３０２名
千葉明徳中学校	１２０名	３６０名	２２９名	１年	８４名
				２年	８６名
				３年	５９名
千葉明徳短期大学附属幼稚園	（１歳児）１５名	３１５名	２９８名	１歳児	１５名
	（２歳児）１５名			２歳児	１４名
	（３歳児）９５名			３歳児	８２名
	（４歳児）９５名			４歳児	９９名
	（５歳児）９５名			５歳児	８８名
明徳本八幡駅保育園		４５名	４４名	０歳児	５名
				１歳児	１２名
				２歳児	１７名
				３歳児	１０名
明徳浜野駅保育園		３６名	４０名	０歳児	５名
				１歳児	７名
				２歳児	８名
				３歳児	６名
				４歳児	６名
				５歳児	８名
明徳やちまたこども園		７５名	７８名	０歳児	２名
				１歳児	８名
				２歳児	１１名
				３歳児	２０名
				４歳児	１８名
				５歳児	１９名

Ⅱ．事業の概要

１．学園全体の状況

２０２３年度の学園財政の状況は、事業活動収入２６億７，４９６万１千円に対し、事業活動支出２５億８，３１３万９千円、基本金組入前当年度収支差額は、９，１８２万円の収入超過となり、２０１２年度から１２期連続で収入超過となった 。（詳細「III. 財務の概要」参照）ただし、少子化等社会的要因による影響を受け、減少が見られる部門もあり、募集改善に向けて様々な施策を検討・実施し更なる経営改善を図っていきたい。

２０２４年度募集（２０２３年度に行った募集活動）について各部門に目を向けると、短期大学は、高校生の保育士志望者の減少傾向が昨年以上に顕著であり、入学者は８４名と２年連続で定員を大きく割ってしまった。高等学校も、併願推薦入試における出願基準を引き上げた影響、併願校の倍率低下に伴う歩留まり入学率の低下から、入学者は２９０名に留まり、中学校も同様に、前年と比較して入学者が減少する（７７名、１４名減少）こととなった。一方で、２０２４年度大学入試において、中学校から入学した一貫コース生、高校入学生のいずれもが質量ともにこれまでで最高の合格実績を出すことができ、今後の生徒募集向上に繋がる成果をあげることができた。認定こども園千葉明徳短期大学附属幼稚園については、短大教員との連携による保育の質向上、コロナ禍においても安全・安心に十分に配慮した来園型イベントを継続するとともに、園情報をホームページにて積極的に広報し、昨年度同様の募集活動を展開したものの、１号認定（３歳）新入園児は４９名に留まった。（昨年対比－１４）今後はこれまで以上に大胆な施策を実施し打開していきたい。明徳本八幡駅保育園については、２０２３年度から幼児クラスを増設し、年度途中からは定員を充足することができ、安定した経営に向け、その足掛かりを築く１年となった。明徳浜野駅保育園、明徳やちまたこども園については、昨年度同様、定員を超える数の園児を確保できた。保育事業各園は、運営方針、保育並びに教育目標に基づき安定した運営が出来、教職員のきめ細やかな対応や時間を掛けて計画した行事や取り組み等を通して、地域に根ざした園となっている。

２．法人事務局

（１）施設・設備の整備

計画していた以下の施設・設備整備を予定通り実施し、教育環境の充実を図った。（詳細「III. 財務の概要」参照）

・短期大学　別館屋上工事　６８７万円
・高等学校　体育館空調設備工事　６，２９７万円
・高等学校　音響機器設置工事　３１８万円
・高等学校　教室ホワイトボード化工事　４３９万円
・本八幡　　園舎改修工事　４，３８２万円

（２）創立１００周年記念事業

２０２５年に迎える学園創立１００周年記念事業の主たる事業であるバリアフリー化、グリーン化を含んだ第二グラウンド構想について将来完成図をまとめ、それに向けて土地の取得を進めた。また、式典、周年史、寄付募集など実行委員会によって検討され、具体化な構想をまとめた。

３．千葉明徳短期大学

２０２３年度はコロナ禍もおさまり、学内も以前のような活気を取り戻しはじめた１年であった。対面授業もこれまで通り行われ、実習、フィールドワークもカリキュラム通り実施することができた。学生募集については、１８歳人口の減少、保育系進学希望者の大幅な減少、他校との競争の激化の中で、昨年度以上に厳しく、入学者は３０名減となった。

（１）学生募集

２０２０年度から募集定員を１２０名に変更し、それ以降３年連続で定員の確保ができた。しかし、２０２３年度については、前年までと同様の募集を展開してたものの、定員を大幅に割り込み入学者９３名となった。

単に本学の募集の問題だけではなく、保育職希望者を増やすためにも、「保育」という仕事の魅力を発信していくことが求められる。

（２）学生支援

①教育と保育実践の連携

“総合保育創造組織”としての認定こども園千葉明徳短期大学附属幼稚園、明徳本八幡駅保育園、明徳浜野駅保育園、明徳やちまたこども園及び系列の明徳土気こども園、明徳そでにの保育園には、本学学生の実習先としてはもちろん、ボランティア、有償研修（アルバイト）等、様々な形で関わり、学生たちは学びを深めている。また、学生の就職先という観点から本学内で説明会を行い、ともに学び続ける保育創造組織の仲間の育成についても連携を深めている。

また、授業でも、コロナ禍以前のように、保育を学ぶフィールド先として、系列園へ入る機会が増えた。

保育に興味を持つ高校生に対しても、系列園で「保育体験」を行う機会を設け、保育職への関心を高め、本学で学ぶきっかけづくりを行っている。

同じ敷地内にある附属幼稚園については、本学の明石教授が園長を兼務して４年目となり、引き続き短大との連携を行い、園内研修に短大教員が参加する等、連携して保育の質向上を目指す取り組みを行った。

②教育課程での取り組み

本学の学びの原点である「体験から学ぶ」「学び合う」を実現するとともに、個々の学生に対する支援の充実が本学の教育の中心である。

コロナ禍もおさまり、以前と同様に授業、実習、フィールドワークを行うことができた。コロナ禍のもとでは、オンライン授業を取り入れたが、このオンライン環境が新たな学習ツールとなり、新たな活用が進んだ。

実習が通常通り行われたことは学生にとって大きいことで、改めてその重要性を知らされることとなった。

「体験から学ぶ」大切な機会である「フィールドワーク」についても、今年度は国内での「わくわく富山」「わくわく遠野」「わくわく沖縄」の３コースを実施することができた。また、ゼミでも宿泊を伴う活動を行うコースもあった。ゼミをはじめとした授業の中でもフィールドへ出向く機会が増えた。

一方、学校生活については、授業終了後帰宅する学生が少なくなく、サークル活動等の活性化は若干の回復となった。学園祭は８月に開催した。これまでの文化がいったん途切れて再出発となっており、２年間での伝統継承の難しさがあった。サークル活動ともども新たな出発として活性化をうながす一層の働きかけが必要となる。

ＩＣＴに関連して１年生については、全員がパソコンまたはキーボード付きの端末を持つこととなり、授業内でグーグルクラスルームの機能の活用等が進んだが、２年間の学生生活の中で必要に応じてより一層使いこなしてくことが求められる。

このような状況の中で、退学者は１学年５名、２学年は２名と昨年度より減少した。

就職に関しては依然好調であり、就職決定率はほぼ１００パーセントに近い状況を維持することができた。

公務員（公立保育所）試験については、受験者１１名、１次合格者７名、２次合格者４名と昨年度と同程度であった。

また、一昨年度から幼稚園・こども園への就職が増加しているが、今年度も同様の傾向が続いている。

今年度についても卒業は認められたものの免許・資格の取得ができなかった者が少なくはなく、そのほとんどは次年度に科目等履修生として自身の課題と向き合い、必要な単位の修得を目指すこととなった。尚、これまでの卒業生の傾向からいうと、保育現場で補助的な仕事しながら学ぶ者が多く、1年後には力をつけて就業していく者が大半である。

コロナ禍は収まりをみせたが、学生の傾向として、全国的に言われているように「学ぶ意欲」が低下気味な姿はなかなか変わらない。学業のみならず、様々なことを面白がる姿勢を作り出すことは容易ではないが、様々なことを面白がる姿勢は保育者として大切な資質であり、改めて学生たちに面白がる、楽しむ気持ちを醸成することが課題である。

（３）教育課程外の取り組みの充実

２０２３年度もこども臨床研究所を中心に、様々な活動に取り組んできた。

卒業生支援として、コロナ禍のもとで学んだ卒業生に対して不安を解消するために学校へ集まる機会を月１回程度もうけた。当初こそ参加する者もいたが、後期に向かって参加者は減少していった。同期の仲間や教員と話をしたい者は一定数おり、特に４～５月の時期に関しては、相変わらず意味がある。

卒業生を中心とした研修会「保育実践研修会」も３ヶ月に１回のペースで開催することができたが、参加者が少なく、開催の仕方について工夫が求められる。

「あそぼうかー」については、昨年度に続き月１回程度の活動で、附属幼稚園、明徳やちまたこども園での活動が中心となった。

「公開講座　めいトーク」は７月に「人とかかわる力を育てる～わらべうたあそび・手遊びを通して～」と題して開催し、参加者は２３名であった。

子育て支援事業である「たいむ」については週２回ではあるが、参加者数を限定することなく通年で実施することができた。ちば産学官連携プラットフォーム事業の「子ども子育て支援連携ワーキンググループ」の活動も継続して行った。

また、千葉市と千葉市内の三短大（千葉経済大学短期大学部、植草学園短期大学、本学）で運営しているＮＰＯ法人「千葉市保育者研修センターＭＡＮＡＢＩ」の事業に講師を派遣し、以下の研修を行なった。

●「千葉市子育て支援員研修」の「基礎研修」と「現任研修」

●「キャリアアップ研修」

（４）短期大学認証評価について

今年度、一般財団法人大学・短期大学基準協会の短期大学認証評価を受け、２０２４年３月８日付けで「適格」と認められた。

指摘事項、及び評価員とのやり取りの中で見えてきた課題について改善を図っていきたい。

（５）教育環境の整備

ＩＣＴ推進のための環境は整ったが、クラス全員でネットに接続するとやや速度が不足するようである。さらなる改善が求められる。

教務システム導入に関しては、様々な事情を勘案し、導入の検討を見送っている。

（６）まとめ

新型コロナ感染症の影響がほぼなくなり、学内は落ち着きを取り戻してきた。この１年間、「体験から学ぶ」「学び合う」という本学の特色を活かせる状況になったことは喜ばしく、多くのフィールドへ出向く姿が見られた。また、一人ひとりに合わせ

た丁寧な支援も変わらず行っている。これらの成果として、就職希望者のほぼ全員が就業するという結果につながったと考えられる。

一方で、様々な学びが可能になってきているにも関わらず、学生の学びの姿勢は消極的なところも見られ、学生のモチベーション向上をより一層図っていくことが課題となる。

４．千葉明徳高等学校

２０２３年度は、新入生３９４名、１２クラス体制のスタートとなった。

今年度は本校が全面的に「新しい進学校」化を標榜してから１０年目になる。この間、中高一貫、特進、進学、アスリートの各コースにおいて、大学進学のためのカリキュラムの構築と、そのための学習指導ならびに進学指導にあたってきた。その結果、今年度においても更なる成果を得ることができた。

２０２４年度入試の大学合格実績における国公立大学の現役合格者数が過去最多の２４名となり、また上位私学への合格者数も同じく過去最多の合格者数となった。これまで進めてきた進学校化という方針が年々形となって現れてきている。この結果は今後の生徒募集へも大きな弾みになっていくと考えられる。

（１）教育活動の取り組み

２０２３年度は、「思考する学び」を進化・深化させることが目標であった。この「思考する学び」について、次のそれぞれの観点から取り組んできた。

１．基礎学力（知識・技能）の育成

２．受験学力の育成

３．メタ認知力の育成

２０２３年度の具体的な取り組みは以下の通りである。

①ラーニング・コモンズの構築

「思考する学び」の実現のためにまず掲げるべきは「学びの空間」、その役割を中心的に担うのが図書館である。その充実を図るべく、従来型の蔵書が多い図書館より、世界に分散する「知」にアクセスでき、そこから新しい「知」を生み出す空間にするための機能が求められる新たな図書館への計画を進めてきた。また、自習室の充実も視野に入れた構想の下、具体的には２０２４年６月よりそのための増改築工事が施工される。

②教科・総合の指導体制の強化

これまでの教科指導や探究活動を踏まえつつ、教科や総合の学習指導など授業での指導にとどまらない本校ならではの指導のあり方を、課題やテスト、自宅学習、進路学習、課外活動を含めた総合的な観点で推し進めることができた。また、コースの枠を超えて、一貫コースと特進コースの共同活動も積極的に行われた。

③自学自習の確立

個々の生徒へは、学習計画や振り返りの機会をホームルームや各授業の中で、朝学習や補修・教科指導を通じて積極的に設けてきた。個々の生徒の学習スタイルの確立は、３年間あるいは６年間の早い段階でなされるべきであるが（一貫生は発掘課程がそれに位置付けられ、高等学校からの入学者は１学期の早い段階）、それについては今後も工夫を重ねていく必要がある。

④面談の充実

面談については、生徒個々人のレベルで学習の方法や進度について絶えず修正する機会が必要であり、学校の年間行事日程として個人面談及び三者面談を１回ずつ設定しているほかに、各クラス単位でも行われた。特に３年生、一貫コース、特進コースは複数回行い、進路について目標を明確にしてそのための方策を具体的に講じるべく、担任のみでなく進路・学習指導、教科担当との面談も行っている。今後は、１・２年生やその他のコースについても面談を通じて早い段階からの意識付けと進路についての目標を明確にして、そのための方策を具体的に講じていく必要がある。

（２）進路指導について

２０２３年度卒業生３０２名の進路は以下の通りである。

	男子	女子	合計	比率
国公立４年制大学	１２	９	２１	７．０％
私立４年制大学	１３４	９７	２３１	７６．５％
短期大学	０	３	３	１．０％
各種専門学校	１３	７	２０	６．６％
その他（浪人・留学等）	１５	１２	２７	８．９％
総合計	１７４	１２８	３０２	１００．０％

【主要大学の合格実績】（浪人含む）

北海道大２名、東北大２名、東京藝術大１名、筑波大１名、千葉大７名、東京海洋大１名、滋賀大１名、北海道教育大１名、弘前大１名、宮城教育大１名、宇都宮大１名、山梨大１名、鹿児島大１名、千葉保健医療大４名、早稲田大６名、上智大４名、東京理科大７名、明治大１０名、青山学院大４名、立教大２２名、中央大５名、法政大２５名、学習院大６名、立命館大１名、日本女子大３名、東京女子大３名、成蹊大８名、成城大７名、武蔵大２名、明治学院大２名、獨協大１９名、國學院大７名、日本大４６名、東洋大４２名、駒澤大１３名、専修大１９名、国際医療福祉大７名、千葉工業大１８６名、東邦大１３名、工学院大２名、東京電機大２０名、大妻女子大１４名、共立女子大４名、東京家政大２名、千葉明徳短期大２名

①２０２４年度入試は、『大学入試改革』４年目、また現行のカリキュラム最終年

であった。昨年度の経験やデータを活かしつつ、最新の入試情報を入手しながら、進路指導に全力で取り組み、その結果、学年全体で４年制大学進学率は８３．５％、国公立大に２４名の合格、ＧＭＡＲＣＨに７２名の合格と、いずれも過去最高の実績となった。特に、旧帝大３名の合格をはじめ、一貫コースの躍進が大きく目立ち、本校６カ年の教育活動の中で確かな学力を身につけた結果と考える。

３年前から配置した進路アドバイザー（元大手予備学校職員）の活用も一層進んでおり、適格な出願指導、データ分析は、生徒や保護者から好評を得ている。

②千葉大合格者７名に加えて、一貫コース２年生が千葉大先進科学プログラム（飛び級入学）に合格し進学した。

③昨今の報道でもある通り、年内入試（総合型選抜・学校推薦型選抜）の定員枠拡大しており、本校においても、千葉県立保健医療大、上智大、立教大、法政大の年内入試で合格者が出ており、学校全体で入試の多様化に向けた対応も進めている。

（３）部活動と特別活動について

アスリート進学コースを中心とする部活動の主な成績は以下の通りである。

チアリーディング部	関東チアリーディング選手権　Ｄｉｖｉｓｉｏｎ１ ＪＡＰＡＮ ＣＵＰ ２０２３ Ｄｉｖｉｓｉｏｎ１	優勝 ４位
硬式野球部	全国高校野球選手権 千葉大会	ベスト１６
サッカー部男子	関東高等学校体育大会千葉県予選 千葉県高等学校総合体育大会 全国高校サッカー選手権大会千葉県大会千葉県高等学校	準優勝 ３位 ベスト８
柔道部	関東高等学校柔道大会（団体） 千葉県高等学校総合体育大会（団体部） 千葉県高等学校総合体育大会（個人）	出場 ベスト８ ３位４名
水泳部	千葉県高等学校総合体育大会（競泳競技）	男子６位、女子２位
剣道部	千葉県高校剣道総体団体 千葉県私立高校剣道大会団体	男女ベスト16 男女ベスト８
バスケットボール部	関東高校バスケットボール選手権大会千葉県予選会 第75回千葉県高等学校総合体育大会バスケットボール大会	ベスト１６ ベスト１６
バトミントン部	関東高等学校バドミントン大会千葉県予選会 女子団体	準優勝
サッカー部女子	千葉県高等学校総合体育大会	ベスト８

（４）生徒募集の取り組み

２０２４年度は入学者２９０名となった。２０２４年度入試は、Ｓクラスの併願推

薦入試における出願基準を大幅に引き上げて実施した。これは、２０２１年度から２年間入学者が多く、２０２４年度の入学者を３２０名に収めたいという事情や近隣私学が併願推薦入試を行わないことを考慮した変更で、この変更がどう影響するか予測のつきにくい状況であった。結果、本校併願校の倍率が予想よりも低く、歩留率が予測を大きく下回り、入学者が２９０名に留まった。ただし、進学校を目指す本校が求めるレベルの入学者を確実に確保している。今後、レベルを落とすことなく入学者を確保していくことが最重要課題となる。

５．千葉明徳中学校

２０２３年度、千葉明徳中学校・中高一貫コースは開校から１３年目となり、進学校化にむけて「思考する学び」を中心に学校づくりを推進してきた。開校以来１０年余りが経過する中で、本校ならびに中高一貫コースに対する評価も定着しつつあり、入学志願者数・入学者数も順調に伸ばしてきた。２０２４年度入試も受験者数を伸ばしたが、不合格者も多く出したことから入学者は７７名、３クラス体制、３学年９クラスとなった。

２０２３年度で８期生までの卒業生を送り出す中、大学合格実績を着実に築いてきた。特に総合学習や教科、学校行事等において、探究心やプレゼンテーション力を育成してきたことで、総合型選抜で上位の大学に合格を果たす生徒を多く輩出することができ、またこうした学力は、大学進学以降も大きな力となっている。このような取り組みの結果が、この数年の間で高く評価されるようになり、安定的な募集へと繋がっている。

（１）教育活動と成果について

これまで中高一貫コースは建学の精神に基づき、生徒一人ひとりの豊かな成長を目指し、教育目標である「行動する哲人」を具現化するために「思考する学び」の推進に取り組んできた。本校では設立以来、大学入試改革や新学習指導要領の導入といった文科省レベルの教育改革に先立って、探究活動やＩＣＴ教育、グローバル教育といった面において独自の先進的な取り組みを進めてきた。具体的には、生徒一人ひとりが自らのｉＰａｄを活用することで、主体的・対話的な学びを推し進め、その成果をプレゼンテーションや課題研究論文を通じて発信する取り組みを行っている。

こうした実践において、教員も絶えず移り変わる新しい情報を得ながら指導内容を改善している。１・２年の「土と生命の学習」と３年の「課題研究論文」は、その内容をより進化させ、内容も充実したものとなった。「土と生命の学習」は、本校の探究活動の入り口として位置付けられ、ここで問いの設定や課題への取り組みについて基本的なことを学び、その延長線上に「課題研究論文」が位置付けられる。「課題研究論文」は、年々、そのレベルが高いものとなっている。４・５年生での探究活動も定着し、ポスターセッションでの発表の取り組みも内容がより豊かなものにな

っており、千葉大学のアセントプログラムや千葉大学、茨城大学の理科研究発表会にも参加し優秀賞を受賞するなど本格的に研究へ取り組む生徒も見られるようになった。こうした取り組みは、生徒の進路選択にも繋がり、総合型選抜で上位難関大学へ合格を果たすケースが多々見受けられる。６年生ではそれまでに養った学習や研究に対してのモチベーションによって、進路実現に邁進する段階と位置付けて進学指導に取り組んだ。

（２）進路指導について

２０２３年度卒業 中高一貫コース８期生の主な大学合格実績は以下の通りである。国公立１６名、これに加えて９期生が「飛び級」で千葉大に合格。早慶上理１２名、ＧＭＡＲＣＨ５０名、日東駒専３１名、その他７８名。

※中高一貫コースでは、探究活動を通して培ったプレゼンテーション力によって、総合型選抜入試(プレゼンテーション入試)において難関大学の合格を果たす生徒が増えている傾向にある。

（３）生徒募集の取り組み

２０２４年度入試もこれまでの募集体制を維持しつつ、学校説明会や模試での説明会などを実施してきた。コロナの影響も徐々に和らぎ、学校説明会や体験授業等の参加者も例年になく多かった。

学校説明会では、本校の教育の特長を積極的にアピールするために、生徒のプレゼンテーションやインタビュー等、生徒の活動を積極的にアピールすることを中心に展開してきた。とくにｉＰａｄ等のＩＣＴ機器を活用した発表や英語によるスピーチ等を全面に打ち出し、生徒の学習状況をお見せした。

適性検査型入試を中心に、本校の教育における特長である「思考力」について問う問題を積極的に取り入れ、広くアピールした結果、適性検査型入試では、市川会場を含めて過去最高の受験者数を集めることができ、本校入試への関心の拡がりがうかがえた。

以上の取り組みによって２０２４年度入試は、受験者数４８８名、入学者数７７名という結果に繋がった。前年度（受験者数４６５名、入学生８４名）と比較して受験者数は大幅に増加したが、合格水準を上げて特待生を絞ったため、結果的に７７名の入学となった。

（４）その他の取り組みとその成果

①本校は他校に先駆けて全生徒がｉＰａｄを持つようになり、これまで様々な教育プラットフォームを導入し、これらが生徒・教員間で定着したものとなっている。これからはリアルとオンラインのハイブリッド型の利用や、より積極的なデータ活用等、もう一段階上の活用を手掛けていくことが求められる。

②文科省が進めるＭＥＸＣＢＴ（国や地方自治体による公的ＣＢＴシステム）やデジタル教科書の学校現場での導入はより本格的なものとなっている。昨年度に

引き続き、本校もその導入にむけての準備に取り組んだ。今後、公教育の場でもＣＢＴ化が進むと予想され、本校としても環境整備をしていかなければならない。

③ＩＣＴ機器の利用の充実に伴ってハード面でもより充実した環境整備を行ってきた。機器の進化にともない、機器の更新は欠かすことができない。今後、予算面を含めて、これらへの対応が求められる。

④ＩＣＴ化に加えて、「思考する学び」の空間づくりを進めてきた。今後、特に図書・視聴覚室の有効利用や書籍や資料等を有機的に活用するための環境整備が求められる。

６．認定こども園千葉明徳短期大学附属幼稚園

（１）運営方針、教育・保育の重点施策に対する成果について

２０２３年度の運営方針と保育理念に基づき、豊かな自然環境の中で子どもたちが自発的に学び、成長する環境を維持した。具体的な活動としては、以下の成果が挙げられる。

未満児クラス・山園舎では、担当職員の経験に基づいた保育の質の向上、短大の教育顧問との連携強化により、組織力の強化と職員間の共通理解が深まり、子どもたちの変化に対する柔軟な対応力が向上した。

３歳以上児クラス・森園舎では、園庭環境の有効利用と安全性に関する職員間の理解を深めた。保育の多様性を追求し、子どもたちの遊びを通じた学びの場を充実させるための努力を続けている。

新たな取り組みとして、年度途中の２学期から「芸術推進チーム」「園庭推進チーム」を設け、附属幼稚園の恵まれた環境、個々の職員がもっている芸術に係る得意分野を組織の力として共有した。子どもたちに余すことなくそれらを伝えていくことを目指し、今後も園における運営の柱として推進していく。

具体的な実績として、「芸術推進チーム」では音楽の感受性を高める目的で、ギター演奏の鑑賞会、短大のゼミ活動との連携を実施。子どもたちが多様な音楽ジャンルを経験することで、音楽に対する興味と理解を深めた。また、日本の伝統的なわらべうたを取り入れた活動を通じて言葉に親しむとともに、絵の具遊びを主体とした創造的な表現活動を推進。これらの活動が子どもたちの感性と創造力の発展に寄与した。

「園庭推進チーム」では、自然豊かな松の森での活動を積極的に行い、自然とのふれあいを通じて環境教育の一環を強化。自然の中での探求活動が子どもたちの好奇心と学びの意欲を刺激した他、園庭の整備を積極的に行い、より安全で子どもたちが遊びやすい環境を整えた。さらに、全職員が園庭をどのようにしたいかということを明確化し、今後のビジョンを共有していく基礎が築かれた。

（２）募集活動に対する成果について

２０２３年度の募集活動では、前年度の成果を踏まえ、さらに多様な取り組みを実施した。具体的な施策と成果について以下の通りである。

①園見学会の充実

小規模ながら質の高い園見学会を数多く設定し、教育方針を詳細に説明することで保護者からの理解を深め、本園の保育環境への信頼感を高めることができた。

②オンラインコンテンツの強化

ホームページにおける「おうちえん」コンテンツを通じて、園生活の魅力的な側面を積極的に発信。保護者の園理解を促進し、園に対する評価の向上や安心感に繋がった。そのことから地域における園の評価の向上、認知度の拡大に繋がり、入園者数の安定化に寄与すると考える。

③園庭開放の充実

園庭を開放するイベントを定期的に開催し、地域住民に園の魅力を直接体感してもらう機会を提供した。

これらの取り組み、前年度ひよこ組の定員数拡充及びそこからの３歳児入園、また、進級や転園を検討する途中入園の家庭への対応強化が功を奏し、２０２３年度中は総園児数が３００名前後で推移した。

しかし２０２４年度４月の１号認定３歳児入園者数は５０名を下回る結果となった。出生数が減少している中で、地域の他園との比較においては劣る数字ではないが、より大胆な施策が必要な時期に来ていることは間違いない。

次年度募集においては、ここに挙げた施策の効果をより踏み込んで検証しながら、募集の向上に繋げたい。

（３）新たに実施した取り組みとその成果について

本年度は、新たな教育技術の導入と創造的な活動推進として、子どもたちの学びの質の向上と教育の多様性を追求した。

①ＩＣＴの活用強化

保育内でのＩＣＴ利用を通し、子どもたちがタブレットを活用して自ら学ぶ姿勢を促進した。これによりデジタルリテラシーの基礎を育みつつ、創造的な表現活動が可能となった。保育者の指導のもと、撮影された写真や動画はドキュメンテーションとして利用され、職員間での教育方法の共有にも寄与した。さらに、これらの取り組みの保護者への発信が、「自然と遊び」という本園の定着したイメージを押し広げ、保護者の多様な要望に応え得る園として、募集活動への好影響を期待する。

②「芸術推進チーム」

芸術推進チーム主導のもと、ギター演奏、わらべうた、絵の具遊びなどの活動を充実させた。これらの活動は子どもたちの感性を豊かにし、同時に人間関係や言葉の発達にも寄与していると考える。

③「園庭推進チーム」

園庭推進チームにより、安全かつ創造的な外遊び環境の検討、提案がなされ、恵まれた環境を最大限活かすべく、新たな一歩となった。これにより、外遊びの時間が子どもたちの身体的、精神的発達を促す重要な役割を果たすことを期待する。

上記２つの推進チームの取り組みは園だよりで毎月報告しており、園の姿勢を分かりやすく外部に発信し、保育者養成校の附属幼稚園としてのブランディングの一つとして、地域への認知度につながるものとして、継続して内容の充実を図る。

④「あそぼうか〜プロジェクト」

継続して、短期大学教員との連携による「あそぼうか〜プロジェクト」を実施し、日中の保育と連携した多彩な教育活動を展開。このプロジェクトを通じて短大学生たちとの実践的な交流も促進され、教育現場での即戦力となる知識と経験を学生に提供した。

上記の取り組みにより本園の教育環境はより豊かで多様なものとなり、子どもたち一人ひとりの可能性を最大限に引き出すための基盤が整いつつある。今後もこれらの取り組みをさらに発展させ、全ての園児が個々の才能と興味に応じて成長できる環境を提供し続けたい。

（４）園児数の動向等

千葉市内の園児数が減少する中、本園は２０２２年度に引き続き一定の成果を残すことができた。これは、本園が提供する充実した教育環境と、積極的な情報発信、園に来ていただく機会の創出とその内容の充実による成果と考える。

「園庭開放」「園JOY」等で園庭を定期的に開放し、広々とした園庭での自然な遊びの機会を提供することで、多くのご家庭に本園の環境を直接体験していただき、これが新たな入園者を引きつける要因となった。また、ＳＮＳでの情報発信により保護者の園理解を促進し、本園の教育理念や日々の活動が地域に認知されたことと考える。

【月別在籍数】

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
在籍数	295	298	298	298	298	302	302	301	301	300	299	298

【年齢別在籍数/３月】

年齢	1 歳児	2 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児
在籍数	15	15	84	97	87

【職員構成/３月】

職種	園長	副園長	主幹	保育教諭	保育教諭(パート)	栄養士	調理員(パート)	看護師(パート)	保育補助	職員(パート)	事務
人数	1	1	2	20	11	1	2	1	1	2	1

（５）苦情（解決）について

特になし

７．明徳本八幡駅保育園

（１）保育園運営方針に関する成果について

２０２３年度より、５歳児までの保育園へ定員変更を行い、３歳以上児も在籍する保育園となった。

６月までは前年度より実施していた改築・改修工事を行っていたこともあり、限られた環境下での保育となった。

４月、新入園児もいたが、入園児数と同数の園児が３月に転園・退園となったことで、定員より少ないスタートとなった。市川市内における近隣の保育園でも以上児の定員割れが見られたため、０歳児から２歳児クラスを定数よりも多く受け入れを行っていった。

工事終了後より、見学者数も増加し、環境が整っていったことで徐々に入園児も増加し年度途中から定員数となることができた。

（２）保育目標と成果について

幼児クラスが増設され、職員全体で保育環境や生活の流れを考え保育内容の充実を目指していった。また、全体でのミーティングを以前の週３回から１回に減らし、全体で話し合うだけでなくクラス内での話し合いの機会をしっかり確保し、そこから出てきた課題に対してパート職員を含めて全体で共有し、各自の意見を聞きながら全職員で検討解決していった。

新型コロナウイルスが５類へ移行したこともあり、行事や散歩等、徐々に以前と同様に行い、保育の内容も変化していった。隣接しているショッピングモールへ食育に伴う買い物に行くなど地域との交流も新たに築いていった。

夏季には熱中症アラート計を購入し、日々数値を測定して安全を確保し、水遊びを実施する機会も多くもつことができた。

保護者の参加する行事も人数制限を設けることなく実施し、日頃の保育を実際に体験してもらうことができた。このことから保護者との信頼関係や、保護者支援へと繋げていく事ができた。

（３）募集活動と成果について

６月まで工事を行なっていたこともあり、保育園見学は、限られた人数や回数

での実施となったが、７月以降は回数も増やし見学者数も増えていった。秋以降は、２０２４年４月の入園に向けた見学者が増加することが予想された為、見学枠を増加し、午前・午後と見学者のニーズも考えながら対応を行っていった。

また、地域子育て支援事業「ぽっぷスマイル」も工事終了後から再開でき、見学から子育て支援事業への誘いや、またそこから入園と繋げることもできた。

（４）新たに実施した取り組みとその成果について

子ども達の体験や遊びから始まった「お祭りごっこ」がお神輿製作へと繋がり、実際に子どもたちが担ぎ、保護者をお誘いしてのお披露目会を実施した。保護者からも好評で、子ども達の成長を喜んでもらえる機会となった。また、ショッピングモール内のレストラン店舗に協力して頂いた上で、レストランモール内の練り歩きも行い、子どもたちにとってとても貴重な体験を創出できた。

（５）園児数の動向等

【月別在籍数】

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
在籍数	44	44	43	43	44	43	46	51	51	51	51	50

【年齢別在籍数/３月】

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
在籍数	8	17	16	9	0	0	50
利用定員	6	10	11	11	6	6	50

【職員構成/３月】

職種	園長	主任	副主任	保育士	看護師	栄養士
人数	1	1	1	5	1	1
職種	パート(常) 保育士	パート(非) 保育士	パート(常) 調理師	パート(非) 調理師		
人数	6	4	2	1		

（６）苦情（解決）について

２０２３年７月、保護者より、保育士の園児に対する対応について指摘を受けた。園長と保護者がで話し合いを行い、謝罪するとともに今後の対策をお伝えした。また他の保護者に対しても改善計画を掲示し周知した。

８．明徳浜野駅保育園

（１）保育園運営に対する成果について

園児数については４０名でスタートし、年間を通して定員を充足している。浜野地域では３歳以上児を受け入れる保育園が不足しており、特に本園は入園希望が多いということで、昨年度より千葉市から定員増の依頼を受けている。

（２）保育目標と成果について

５月から新型コロナウイルス感染症の５類移行措置が取られたが、マスクの着用や手指消毒等の感染症対策をしながら保育を実施し、上半期は懇談会・保育参加を行わなかった。コロナ禍でも実施してきた「おたのしみ会」や学園への「秋の遠足」は例年通り行い、下半期の行事については、コロナ禍以前に戻して実施していった。保育参加については、インフルエンザの流行に伴い中止せざるを得ない結果となったが、大きく感染症が流行することはなかった。

年間を通して、大きな行事やクッキング保育等を実施することができ、また保育の発信をしていったことで、本園の目指す「大きな実家」にさらに一歩近づけたと考える。

また、４年振りに卒園児が集まる「めいとくのつどい」を開催し、１００名を超える参加があり、本園の実家的な存在価値を再認識できる機会となった。

（３）募集活動と成果について

今年度も、できるだけ土曜日に見学するようご協力いただき、ゆっくり園内を案内したり、説明や質問を受けたりできるようにしていった。その際に本園の保育理念や決まりごとなどを丁寧に伝えることを心掛けた。そういった対応もあって次年度も４月当初から定員が充足される状況である。

（４）新たに行った取り組み等とその成果について

①千葉県第三者評価の受審

開園１５周年に先駆けて、今までの保育の振り返りと検証を兼ねて第三者評価を受審した。日頃より、月のおたよりや今日の出来事を通して保育内容を伝えていったことで、保護者の保育園に対する関心も高く、保護者アンケートの回答率は８３％であった。受審にあたり、書類等の準備を進める中で、新たな気づきや本園に不足している書類等が確認でき、園や職員にとって良い振り返りの機会となった。

また、運営面・保育面において高い評価を受けることができ、職員の自己肯定感と今後のやる気にも繋がった。

②認可定員増

本園への入園希望者が多いこと、また、浜野地区の子育て世帯が増加していることから、２０２２年度来千葉市より定員増を依頼されていた。保育園の社会的意義を鑑み、これに応えるべく様々な検討を行った上で、次年度より３歳以上児を各年齢１名ずつ増やし、３６名の定員を３９名に変更する申請をし、これが認可された。少子化により、定員を充足できない保育園が増加する中での定員増は大きな判断であったが、千葉市より感謝の意をいただいている。

（５）園児数の動向等

【月別在籍数】

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
在籍数	40	40	41	40	40	41	41	41	41	41	41	44

【年齢別在籍数/３月】

年　齢	０歳児	１歳児	２歳児	３歳児	４歳児	５歳児
在 席 数	9	7	8	6	6	8

【職員構成/３月】

職種	園長	主任	副主任	保育士	栄養士	看護師	調理員	保育補助
人数	1	1	1	10	1	1	2	1

（６）苦情（解決）について

特になし。

９．明徳やちまたこども園

（１）運営方針に対する成果について

①子どもの「発達を支える営み」としての保育・教育の在り方を、保育教諭はじめ職員一人ひとりが丁寧に子どもに関わり、その子を理解していくことを心掛け取り組んできた。この真摯な取り組みの姿が日常的な姿となってきた。

②子どもがのびのびと身体を動かして遊べる環境を、子どもと共に創ることや、年齢によっては保育者が遊びを発展させたり深めたりするよう働きかけてきた。

③２０２３年度においては、兼ねてから構想していた大型遊具の設置、築山の改修工事、乳幼児の砂場設置、0,1歳児の環境の見直しなど、子どもにとっての環境を充実させることに重点をおいて取り組んだ一年となった。

④コロナが５類へ移行したこともあり、コロナ前の保育に戻しつつも感染症対策には看護師を中心に取り組んできた。その他、熱性けいれん時の対応なども研修の中で取り組み、現状に合わせた保育対応を柔軟に行えるよう職員間の連携やコミュニケーションをとるよう努めてきた。

⑤地域の方々のご好意で筍堀、サツマイモ栽培、人参の収穫、ひょうたん作り、トウモロコシやスイカなど八街の四季の農産物との関りが、子どもたちへの食育の大きな力となった。その他にも、栄養士が保育の中に入り、実際に調理活動を行って食育に取り組んできた。

（２）教育目標などに対する成果について

教育目標をより具体的に日々の保育・教育に反映できるように、学級経営案を３期に分けて計画、実践・考察、反省・課題、実践をベースに子どもの実態を見つめ直してきた。そのことから意識して教育目標を踏まえた保育実践が進んでいると

考える。

（３）募集活動に対する成果について

①一時保育や子育て支援センターの活動に参加した子どもの入園が一定数ある。このことは、実際にこども園に足を運んでくれることで、園の保育の姿や、職員の様子、自分の子どもと遊んでくれたり可愛がってくれたりする在園児の姿を見て、入園に繋がっていると考える。そして、園見学が年間６０～７０組近くあり、実際の園の様子を見て入園したいという保護者が増加している。

それらの効果が実際に入園希望の数字にも表れ、２０２４年度入園は、本園を第一希望とする家庭のみであった。これだけ八街で認知されてきたのは、日々の保育を保護者が実際に目にし、その良さが保護者間の口コミとなり入園に繋がっていると考える。

②ホームページで日々の園児の生活の姿や給食メニューをコメントで伝えている。「園日記」のアクセス数は日々３００アクセス前後を記録し、１０００アクセスを超える日もあった。見学に来るきっかけは、ホームページの園日記を見てと答える保護者がほとんどであったことから園の広報として重要であったといえる。

（４）新たに行った取り組みについて

２０２３年度は、これまで計画していた大型遊具の設置と築山の改修工事、乳幼児用の砂場設置、ステージ設置、ピザ窯、０，１歳児の室内環境の充実、ホール倉庫の棚設置、業者による便器掃除、防犯対策のための自動センサーライトの設置など、環境面での充実を図った。そのことで、保育の充実はもちろん、保護者や地域の方々への理解や広報活動にも繋がっていった。明徳やちまたこども園はどのような保育を大事にしているかといったことが伝わりやすく、八街市内の保育園との保育の違いも見えやすくなってきた。これらのことから、保護者が本園の保育に共感し入園させたいということに繋がってきた。

（５）園児数の動向等

【月別在籍数】

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
在籍数	77	78	80	81	81	81	80	81	82	82	82	82

【年齢別在籍数/３月】

年　齢	0 歳児	1 歳児	2 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児
在 席 数	6	8	12	20	18	18

【職員構成/３月】

職種	園長	副園長	指導保育教諭	保育教諭	パート保育教諭
人数	1	1	2	9	9
職種	栄養士	看護師	調理師	事務	用務
人数	1	1	1	1	1

（６）苦情（解決）について

保護者から、園児間のトラブルについて相談があり、本園職員、両園児の保護者で話し合いを行い解決に至った。

Ⅲ．財務の概要

１．事業活動収支の推移

（単位：千円）

		科目/年度	２０２０年度	２０２１年度	２０２２年度	２０２３年度
教育活動収支	事業活動収入の部	学生生徒等納付金	984,995	1,015,660	1,067,171	1,095,329
		手数料	28,231	29,703	32,714	33,666
		寄付金	14,250	12,997	14,168	14,807
		経常費等補助金	1,238,727	1,206,747	1,242,367	1,316,956
		付随事業収入	102,230	76,893	75,459	91,210
		雑収入	43,745	71,637	61,110	76,555
		教育活動収入計	2,412,179	2,413,636	2,492,989	2,628,525
	事業活動支出の部	人件費	1,629,616	1,649,141	1,697,259	1,784,048
		教育研究経費	425,892	444,604	570,863	573,263
		管理経費	228,759	223,570	201,946	195,364
		徴収不能額等	381	39	0	0
		教育活動支出計	2,284,648	2,317,354	2,470,068	2,552,676
	教育活動収支差額		127,531	96,282	22,920	75,849
教育活動外収支	事業活動収入の部	受取利息配当金	515	509	385	1,617
		教育活動外収入計	515	509	385	1,617
	事業活動支出の部	借入金等利息	17,653	16,094	13,270	11,328
		教育活動外支出計	17,653	16,094	13,270	11,328
	教育活動外収支差額		△17,137	△15,585	△12,885	△9,711
経常収支差額			80,697	110,393	10,035	66,138
特別収支	事業活動収入の部	資産売却差額	0	0	0	0
		その他の特別収入	14,196	15,461	93,078	44,818
		特別収入計	14,196	15,461	93,078	44,818
	事業活動支出の部	資産処分差額	186	5,539	16,409	19,134
		その他の特別支出	13,672	0	0	0
		特別支出計	13,858	5,539	16,409	19,134
	特別収支差額		338	9,922	76,669	25,683
［予備費］						
基本金組入前当年度収支差額			90,620	110,732	86,705	91,821
基本金組入額合計			△69,311	△133,543	△310,423	△254,872
当年度収支差額			21,308	△22,811	△223,718	△163,050
前年度繰越収支差額			△4,071,814	△4,049,003	△4,050,506	△4,274,224
基本金取崩額			0	0	0	0
翌年度繰越収支差額			△4,050,506	△4,071,814	△4,274,224	△4,437,274
事業活動収入計			2,429,607	2,426,890	2,586,452	2,674,961
事業活動支出計			2,338,988	2,316,158	2,499,747	2,583,139

（注）金額は、各項目において千円未満を四捨五入して記載しており、合計額が一致しない場合もある。

２０２３年度決算は、事業活動収入２６億７，４９６万円に対し事業活動支出は２５億８，３１３万円となり、基本金組入前当年度収支差額は、９，１８２万円の収入超過となった。（２０１２年度から１３期連続での収入超過）また、当年度収支差額は、１億６，３０５万円の支出超過となった。２０２３年度決算は、教育活動収支差額が前年度比５，２９２万円の増加、それに伴い経常収支差額においても、前年度比５,６１０万円の増加となった。増加の主な要因は、中学校・高等学校の総生徒数増により、学生生徒納付金収入並びに経常費補助金収入が大幅な増収となったことである。一方、近年定員確保が難しくなっている短期大学、附属幼稚園においては、募集活動に最大限注力する他、収支均衡が保てる経営体制への移行（計画）が求められる結果となった。明徳本八幡駅保育園、明徳浜野駅保育園、明徳やちまたこども園は順調に推移している。次年度以降の運営方針が明確に掲げられ、その為の定員変更申請も行った。それぞれの地域からの信頼も厚く、今後も安定した運営が見込まれる。

２．事業活動収支計算書における財務比率の推移

区分／年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
人件費比率 （人件費÷経常収入）	69.5%	66.9%	67.6%	68.3%	68.1%	67.8%
人件費依存率 （人件費÷学生生徒納付金）	171.1%	164.1%	165.4%	162.4%	159.0%	162.8%
学生生徒納付金比率 （学生生徒納付金÷経常収入）	40.6%	40.8%	40.8%	42.1%	42.8%	41.6%
教育研究経費比率 （教育研究経費÷経常収入）	17.9%	19.4%	17.6%	18.4%	22.9%	21.7%
管理経費比率 （管理経費÷経常収入）	9.5%	10.6%	9.5%	9.3%	8.1%	7.4%
基本金組入率 (基本金組入額÷事業活動収入)	8.2%	1.9%	5.5%	2.8%	12.4%	9.5%

人件費比率は、人件費が経常収入に対して占める割合を示す指標である。同規模の高等学校法人における平均は６２．８%であり、本学園の人件費比率６７．８％は平均を上回る比率となっている。人件費比率は、教職員の給与水準だけでなく、学生・生徒に対する教職員数、適正人員という視点から見ることも重要である。

続いて人件費依存率は、人件費が学生生徒納付金に対して占める割合であり、同規模法人の平均は１２８％、本学の人件費依存率は１６２．８％となった。学生生徒納付金比率は、学生生徒納付金が経常収入に占める割合であり、学校法人の事業活動収入の中で最も多くを占め、補助金や寄付金と異なり外的要因に影響されない収入であるため、安定した収入の確保に向けて最重要である。同規模法人の平均は４９．１％、本学の比率は４１．６％となっている。

教育研究経費比率、管理経費比率は、それぞれの支出が経常収入に対する比率であるが、教育研究経費比率は、その比率が高いほど学生生徒への教育関係経費が多く確保されている指標となり、管理経費比率は、教育経費以外に使用される管理部門の経費等であり、比率が低い方が望ましいとされている。同規模法人の平均は、教育研究経費比率２９．２％、管理経費比率７．１％、本学の平均は、教育研究経費比率２１．７％、管理経費比率は７．４％となっている。基本金組入

率は、事業活動収入の総額から基本金への組入の状況を示す指標である。各年の比率が、安定している場合は、２号基本金等への計画的な組入が行われていることとなる。

３．施設・設備への投資額の推移

（単位：千円）

科目／年度	２０２０年度	２０２１年度	２０２２年度	２０２３年度
施設関係支出	267,613	135,826	380,298	164,485
設備関係支出	57,988	32,131	40,673	62,920
合　計	325,601	167,957	420,971	227,405

２０２３年度の主な施設関係支出として、第二グラウンド計画地内の山林３,８８６㎡及び隣接地の山林２,０３９㎡を地権者６名より買い取ったことが挙げられる。第二グラウンドの造成工事は２０２４年度より計画的に行われる予定である。

建物支出は、短期大学における別館屋上防水工事・防火スクリーン設置工事、高等学校における体育館空調設備１期工事（アリーナの空調設備）、生徒ホール・合宿所ＬＥＤ照明工事、１号館　２１教室ホワイトボード設置工事・体育館音響機器の更新工事、中学校　特別教室へのＬＥＤ照明設置工事、明徳本八幡駅保育園における定員変更（３歳児、４歳児、５歳児を受け入れ）に伴う園舎改修工事が主なものである。

構築物支出は、学園内西側舗装工事、やちまたこども園　大型園庭遊具の更新工事等で、建設仮勘定支出は、第２グラウンド開発に関わる申請業務や開発変更許可申請業務に関する経費を計上した。

設備関係支出は、教育研究用機器備品として高等学校　１号館２１教室　プロジェクターの更新、中学校・高等学校でのｉＰａｄアクセスポイントの大規模リニューアル(工事)、中学校　実物元素周期表、定温恒温乾燥機、小型定温恒温乾燥機等の理科用備品購入、学生・生徒・園児用　机、椅子、ロッカーの更新が主なものである。管理用備品は、幼稚園児送迎バス安全装置（の設置）、浜野駅保育園　電話機設備一式（更新工事)等である。図書支出については、全部門合わせて１,４０４冊の本を購入し、図書館蔵書は総計６９,９８５冊となった。また、法人事務局ではＳＤＧｓの一環として、各部門で共通して使用する公用車　電気自動車「日産サクラ」を導入した。

４．借入金の推移

（単位：千円）

科目／年度	２０２０年度	２０２１年度	２０２２年度	２０２３年度
長期借入金	713,416	704,943	731,910	670,877
短期借入金	343,983	306,873	106,033	111,033
合　計	1,057,399	1,011,816	837,943	781,910

（注）各年度とも３月３１日現在の残高を記載している。

長期借入金は、前期末残高７億３,１９１万円に、新規借入５,０００万円、返済１億１,１０３万３千円を計上し、期末残高６億７,０８７万７千円となり、前年度比６,１０３万３千円の減少となった。短期借入金のうち運転資金借入は１億５,０００万円、返済も同様に１億５,０００万円とし、２０２２年度に引き続き、運転資金での短期借入金残高は０円となった。

短期借入金については、毎年、期中の一時的な資金不足により調達を行うが、約定通りに年度末での返済を行うこととしている。今後、期中の調達についても極力抑えることを目

標とし、安定した資金繰りに注力していきたい。短期借入金残高は、返済期限が１年以内の長期借入金のみの計上であり、長期及び短期の借入金残高の合計は、前年度比５,６０３万円減少し、７億８,１９１万円となった。

５．貸借対照表の推移

（単位：千円）

科目／年度	２０２０年度	２０２１年度	２０２２年度	２０２３年度
資産の部				
固定資産	3, 941, 394	3, 934, 663	4, 143, 597	4, 147, 973
有形固定資産	3, 824, 256	3, 794, 635	3, 988, 728	3, 986, 572
特定資産	70, 997	83, 518	86, 879	95, 145
その他の固定資産	56, 140	56, 510	57, 989	66, 255
流動資産	948, 731	1, 096, 710	689, 825	634, 558
資産の部合計	4, 900, 126	5, 031, 374	4, 833, 423	4, 782, 531
負債の部				
固定負債	873, 797	863, 898	888, 747	819, 747
流動負債	1, 053, 846	1, 104, 374	794, 870	721, 156
負債の部合計	1, 927, 644	1, 968, 272	1, 683, 617	1, 540, 903
純資産の部				
基本金	7, 044, 295	7, 113, 607	7, 424, 030	7, 678, 902
繰越収支差額	△4, 071, 814	△4, 050, 505	△4, 274, 224	△4, 437, 274
純資産の部合計	2, 972, 481	3, 063, 101	3, 149, 806	3, 241, 628
負債及び純資産の部合計	4, 900, 126	5, 031, 374	4, 833, 423	4, 782, 531

《資産の部》

固定資産は４１億４，７９７万円となり、前年度比４３７万円の増となった。有形固定資産は取得２億２，９８１万円、除却(資産の廃棄)は５，３４９万円、減価償却累計額を差し引いた有形固定資産は前年度比１，２１５万円減の３９億８，６５７万円、特定資産は８２６万円増の９，５１４万円、その他の固定資産は８２６万円増となった。特定資産では、短期大学での改修工事に充当した２号基本金特定資産の取崩しを計上、１００周年記念事業引当特定資産の継続計上、また新たに保育施設での施設設備引当特定産の計上、その他固定資産の増加は、有価証券の増加で、千葉市令和５年度第４回公募公債１，０００万円の購入を行った。

流動資産は６億３，４５５万円となり、前年度比５，５２６万円減少した。
流動資産の主な構成比率は、現金預金７９．６％、未収入金１９．５％、その他０．９％、未収入金は専任教職員の退職者数・授業料等の徴収状況・補助金の入金時期により大幅に増減する。２０２３年度の総資産額は、前年度比５，０８９万円減少の４７億８，２５３万円となった。

《負債の部》

固定負債は８億１，９７４万円となり、前年度比６，８９９万円減となった。流動負債は７億２，１１５万円となり、前年度比７，３７１万円減となった。長期借入金は、新たに５，０００万円を借り入れ、長期の借入残高６億７，０８７万円となった。返済期限１年未満の長期借入金１億６０３万３千円を返済し、長期借入金からの次年度返済予定の１億１，１０３万３千円の増加で１億１，１０３万３千円の残高となった。２０２３年度の負債の部合計は、前年度比１億４，２７１万円減少の１５億４，０９０万３千円となった。

６．貸借対照表における財務比率の推移

区　分	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
総　負　債　比　率 （総負債÷総資産）	37.9%	37.0%	39.3%	39.1%	34.8%	32.2%
流　動　比　率 （流動資産÷流動負債）	67.6%	73.2%	90.0%	99.3%	86.8%	87.9%
基　本　金　比　率 （基本金÷基本金要組入額）	92.7%	92.2%	90.0%	90.0%	90.1%	90.8%
固定長期適合率 （固定資産÷(純資産+固定負債)	110.4%	107.7%	102.7%	100.2%	102.6%	102.1%

総負債比率は、負債総額が総資産に対する割合で、総資産に対する他人資金の比重を評価する重要な比率である。この比率は低いほど望ましく、５０％を超過すると総負債が純資産を上回ることを示し、更に１００％を超過すると総負債が総資産を上回る状態、つまり債務超過の状態を意味する。同規模法人の平均は１５．３％、本学の総負債比率は３２．２％となった。

続いて流動比率は、流動資産に対する流動負債の割合である。１年以内に支払わなければならない流動負債に対し、現預金または１年以内に現金化が可能な流動資産がどの程度留保されているか、学校法人の短期的な支払能力を示す重要な指標となる。この比率が２００％を超える場合、優良と判断される。逆に１００％を下回っている場合は、流動負債を固定資産に投下していることとなり、資金繰りに窮している判断となる。同規模法人の平均は２５６．５％であるが、本学の流動比率は８７．９％となっている。しかしながら、本学の場合は、近年、流動資産から有価証券もしくは特定資産（預金）への資金の振替等を行っている為、それらを含めれば流動比率は改善するものと思われる。

続いて基本金比率は、基本金組入対象資産の要組入額に対する組入済み基本金の割合である。未組入額が多いことは、借入金や未払金で組入対象資産を取得していることを意味するため、１００％に近い比率が望ましいとされている。同規模法人の平均は９４．７％、本学は９０．８％となった。

固定長期適合率は、固定資産を取得する場合に自己資金の他に長期借入金で賄うべきであるという原則に対し、どの程度適合しているかを判断する指標である。同規模法人の平均は８９．１％、本学は１０２．１％となった。１００％より低い比率が理想であるが、本学の場合、流動比率と同様に施設設備引当特定資産とし

て、固定資産の特定資産に短期的な資金の計上がされているためこの限りではないと考える。引き続き、財務内容及び財務比率の改善に向けて注力していく。

明徳は次の世代に

100th

Anniversary

in 2025